和紙のある暮らし

富山市の八尾町は室町時代から多くの家庭で手作業による紙すきが行われていた。しかし時代が進むにつれて機械による紙の生産が始まると和紙産業は衰退していった。
この住宅は室町時代から変わらない八尾和紙の文化を継承しながら建具替えを行い、障子や油団などの和紙製品を用いて環境に合わせて変化させていく。冬から春にかけて使用していたふすまや障子をはずし、夏には葦戸などの夏用の建具に入れ替え、床には油団を敷く。和紙を住人たちが衣替えをするための道具として使用することで暮らしの中に和紙の文化が根付いていく。

●計画地

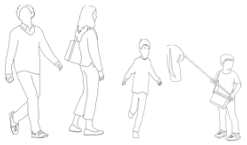
計画地:富山県富山市八尾町上新町

石畳の町並みで江戸時代の佇まいが残っている街である。北側の通路ではおわら風の盆の町流しが行われる

●八尾町の特徴

八尾町は、江戸時代初期に門前町として発展し、古い街並みが今も残る町である。越中と飛騨との交易からもたらされた多くの利潤から様々な町民文化が育まれた。毎年5月3日には越中の美術工芸の粋を集めた絢爛豪華な二層屋台の6本の曳山が曳き廻され、毎年9月1日から3日間開催される「おわら風の盆」は、叙情豊かで、哀調の中に優雅さをたたえた唄と踊りは、日本の代表的な民族芸能との評価を受けて、近年では近県の宿泊施設の収容人数を超える観光客が訪れて加賀から飛騨にいたるまで賑わいをもたらす一大郷土芸能イベントの町となっている。

●家族構成



父 和紙職人　母 和紙職人　子供　子供

家族構成は父、母、子供2人の計画とした。この住宅には和紙職人の方も日常的に出入りする計画とする

●八尾和紙とは…

八尾和紙は富山県富山市八尾町で生産されている和紙で、富山県の伝統工芸品「越中和紙」のひとつで独自の染色法である「型染め」で仕上げられた模様紙や紙加工品が作られていることで、丈夫で厚みがあり、自然の手ざわり肌ざわりの温かみがある。
八尾和紙の歴史は薬の袋などの需要が集中したことが理由で室町時代に急速に発展しており、八尾和紙の生産は、ほとんど手作業で行われており、一週間で仕上がるのは500～600枚ほど。

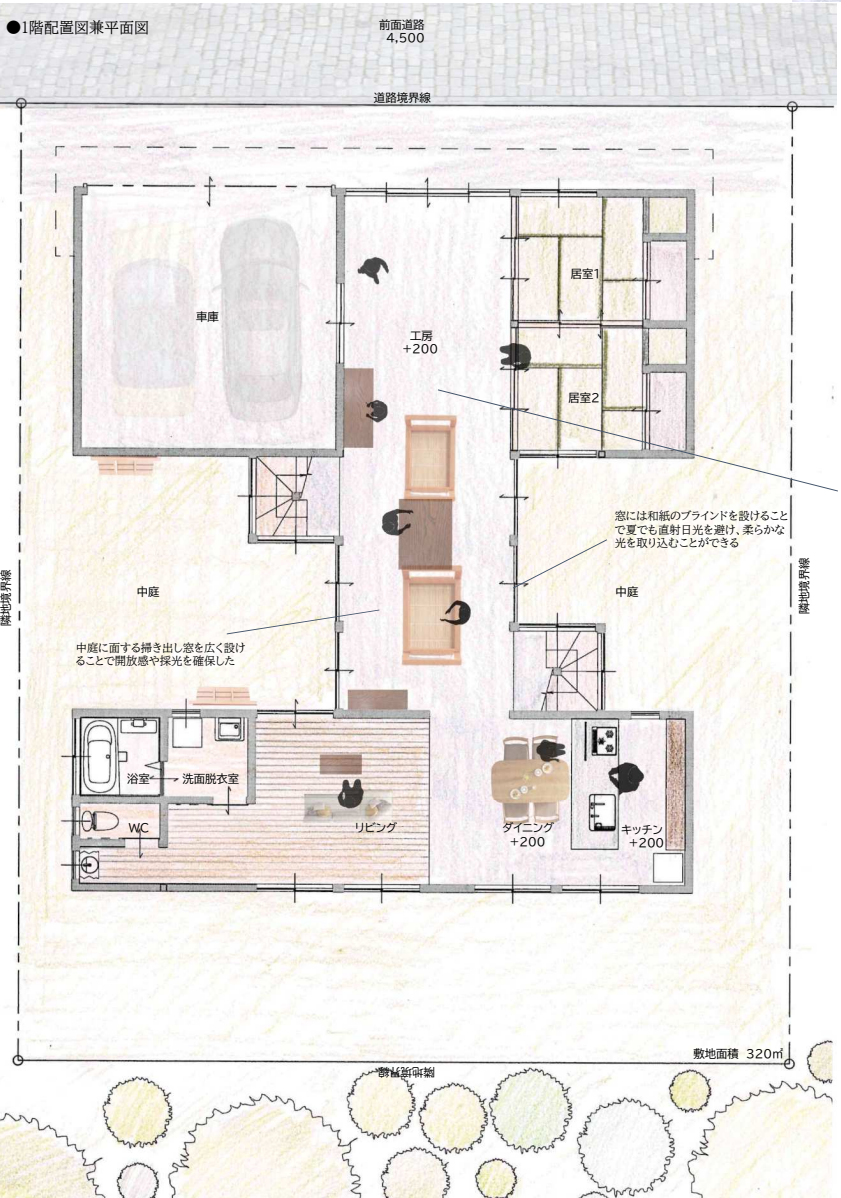
●建具替えの文化

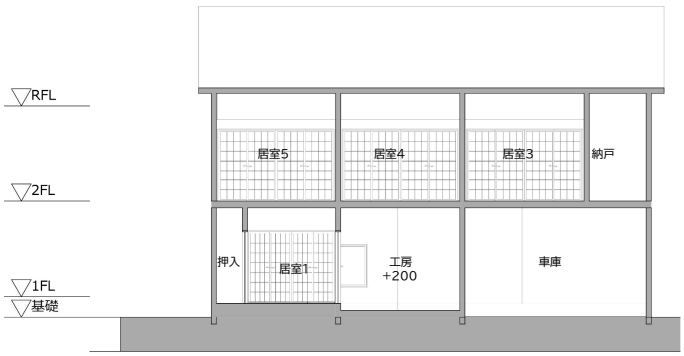
建具替えとは季節の変わり目に行われる「住まいの衣替え」で、襖や障子などの建具を取り替えることである。梅雨の晴れ間である6月頃に夏用の建具に入れ替え、9月頃に冬のしつらいに戻す。

夏 すだれ、葦戸、油団　冬 ふすま、障子

油団(ゆとん)とは和紙を何層にも重ねて表面に油を塗った日本の伝統的な敷物で、夏の暑さをしのぐために使用されている。表面がつるりとしていて、触れた体の熱を吸収し、表面が水面のように反射し、夏の景色を映し出す。使い込むほどに色艶が増し、耐水性が上がることで100年使えると言われている。

●1階配置図兼平面図



●2階平面図

●断面図